

いわての“大地”と “ひと”と共に



国立大学法人 岩手大学
地域連携推進部
地域創生推進課

〒020-8551
岩手県盛岡市上田四丁目 3-5
TEL.019-621-6629
FAX.019-621-6656
E-mail: sanriku@iwate-u.ac.jp
平成 31 年 1 月 31 日発行

<http://www.iwate-u.ac.jp/koho/newsletter.shtml> <岩手大学ホームページからもご覧いただけます。>

date
9.12~18

シニアカレッジ 2018

9月12日から18日までの1週間、シニアカレッジを開催しました。今年は、24名の申込があり、すべて岩手県外からの参加でした。2007年の開講から12回目を迎える今回の舞台は陸前高田市で、東日本大震災以降、市と市民が丸くなって復興に向けて進んでいるまさに復興最前線の状況を受講生の皆さまに触れて頂く内容としました。



入構式の記念撮影

ました。

閉校式後の懇親会では、最多11回参加の受講生の表彰の他、本学合唱部の合唱、受講生によるハーモニカ演奏があり、合唱部と受講生と一緒に学生歌を歌い終了しました。



「復興最前線ツアー」の様子

全13回の講義うち、前半は岩手大学を会場に、岩淵学長の「スケールシフト学」をはじめに、7名の講師による講義を行いました。そして、会場を陸前高田グローバルキャンパスに移し、戸羽陸前高田市長など4名の講師をお迎えして講義を行いました。また、「復興最前線ツアー」と題し、建設中の巨大防潮堤に登り、海岸線や中心市街地の工事の様子を見学して頂きました。最後は、菅原理事の講義で締めくくり



岩淵学長の講義の様子



戸羽市長の講義の様子



合唱部と受講生が学生歌を歌っている様子

スケジュール	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
9/12(水)								受付 入学式 休館	講義 「スケールシフト学」 岩淵学長 岩淵 隆	交流会 若でんはパーティー レストラン Kanji		
13(木)	講義 光が輝く復興のまちづくり 岩手県立大学 復興部 復興課 復興課	休館	講義 一歩の歩を歩かし人 復興部 復興課	休館	講義 陸前高田グローバルキャンパス 復興部 復興課	休館	講義 三陸のサケと日本のサケ 一人ひとりの関わりと生産者 復興部 復興課	休館	講義 「陸前高田から世界を支援する」 ～北沢誠也氏が語る～ 復興部 復興課	休館	交流会 チョウキン レストラン Kanji	夕食 懇親会 ～19:30
14(金)	講義 岩手大学で生まれた 栄花+花井の早期発見技術 復興部 復興課	休館	講義 災害に強いまちづくり ～防災ロードゲーム 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	交流会 チョウキン レストラン Kanji	夕食 懇親会 ～19:30
15(土)	前白鳥山行動(岩手県立自動車(株)企業旅行「歴史とフルーツの産地めぐりツアー」(任意参加))											
16(日)	移動(陸前高田へ) 岩手県立大学 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	交流会 チョウキン レストラン Kanji	夕食 懇親会 ～19:30
17(月)	移動(岩手へ) 岩手県立大学 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	交流会 チョウキン レストラン Kanji	夕食 懇親会 ～19:30
18(火)	移動(盛岡へ) 岩手県立大学 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	講義 復興最前線ツアー ～被災地視察～ 復興部 復興課	休館	交流会 チョウキン レストラン Kanji	夕食 懇親会 ～19:30

記念撮影

date
11.7

平成30年度いわて産学連携フォーラム「リエゾン-I」マッチングフェア

岩手大学では岩手県全ての大学等研究機関及び金融機関と連携し「いわて産学連携推進協議会（リエゾン-I）」を設立し地域貢献を推進していますが、今年も岩手大学復興祈念銀河ホールを会場に「いわて産学官連携フォーラム リエゾン-Iマッチングフェア2018」を開催しました。本事業は企業のニーズと大学等研究機関の研究シーズとのマッチングを図ることを目的に、協議会に参画している県内の研究機関の研究シーズの発表やパネル展示及び研究者との個別相談会などを通じた産学マッチングを目的に開催しています。今年も、大学および公設研究機関、地方自治体や企業関係者など約110名に参加いただきました。



は存在しない」というイノベーションの実現に向けた取り組みをご紹介します。また、昨年度リエゾン-I研究開発事業化育成資金贈呈企業のうち、株式会社三光化成（一関市）から「表面に微細パターンを有する生化学分析装置用射出成型品の開発」、株式会社東亜電化（盛岡市）から「自動車部品に対応したマグネシウム合金の黒色表面処理技術の事業化」について紹介していただきました。

銀河ホール2階の展示スペースでは、リエゾン-I参画研究機関等を中心に、計10機関/34テーマのパネル展示やリエゾン-I研究開発事業化育成資金の過去の受賞企業の中から8社による事業紹介等のパネル展示を実施し、技術シーズなどについてショートプレゼンを行いながら来場者との交流を図りました。



株式会社IMUZAKの澤村一実代表取締役社長による基調講演

唯一無二の技術として曲面への形状制御可能な超微細加工技術でベンチャー企業を立ち上げた、株式会社IMUZAKの澤村一実代表取締役社長から「実践するオープンイノベーション」と題して、基調講演をいただき、「ニーズの無いところにビジネス



銀河ホール2階で行ったパネル展示の様子

date
12.5

さんりく水産・海洋研究セミナー in 大船渡

“水産業の復興を成し遂げるための課題解決に向けた調査研究の紹介”

三陸の水産業は震災からの復興途中であり、漁港などのハード的な施設整備についてはほぼ終了しましたが、これから所得拡大を図ろうとする中、その動きを阻もうとする新たな課題が発生しており、その課題を解決するために、多くの水産・海洋研究者が研究開発を進めています。

その研究者の取組を市民に理解してもらい、海洋・水産に関する研究機関と地域住民等の相互交流を促進するとともに、三陸の水産業の復興と水産研究の人材育成を図るため、セミナーを大船渡市魚市場3階多目的ホールで開催しました。

本セミナーは、いわて海洋研究コンソーシアム、岩手大学、三陸復興・地域創生推進機構、岩手大学三陸水産研究センター及び大船渡市の共催で開催しました。大船渡市では、以前は北里大学海洋生命科学部が毎年シンポジウムを開催していましたが、昨年からは当セミナーが引き継ぎ2回目の開催となります。

講演者は、海洋研究機関の集まりであるいわて海洋研究コンソーシアムのメンバーから選出することとし、事前に、大船渡市水産課を通じて、どのような講演が聞きたいか漁業関係者からヒアリングした結果、現在大きな問題となってい

るホタテガイの貝毒対策への要望が強かったため2つの講演を貝毒研究で選定しました。



田中三陸水産研究センター長からの講演

その結果、130名を超える市民、漁業関係者、水産加工関係者、自治体職員、研究者等が集り、貝毒対策の知見を深めました。今後も漁業関係者からの要望も踏まえて企画していきたいと考えております。



130名の参加者

date
12.2

平成30年度 三陸復興・地域創生推進機構 首都圏報告会

東日本大震災から7年以上経過し、復興支援の取組は課題に直接アプローチするものから、これまでの経験を踏まえた新たな取組に変化しています。岩手大学は、本学から見た被災地の現状をお伝えすると共に、首都圏の市民の方に身近な地域が抱える課題とどう向き合うかを考える機会となるよう報告会を開催しています。3回目となる今回は100名以上の方にご来場いただきました。

はじめに、地域防災研究センターの福留邦洋教授が、地域防災教育研究部門（地域防災研究センター）の設立経緯や地域の自主防災組織への支援、自治体・医療関係者への実践的な危機管理講座、市民、中学生などへの防災に関する講習、ハーバード大学（米国）・精華大学（中国）と共同で開催した「国際防災・危機管理研究 岩手会議」などについて報告しました。続いて、地域防災教育研究部門兼務教員で教育学研究科の森本晋也准教授が、2016年の台風10号被害を教訓に、岩泉町教育委員会や国土交通省岩手河川国道事務所、盛岡地方気象台の協力を得て作成した防災教育教材（学校版タイムライン）の紹介やそれを使った教員研修、中高生への講習の実施などについて報告しました。

次に、これまでの被災動物支援の取組やその教訓を踏まえた被災動物支援のための組織作り等について、三陸復興部門被災動物支援班長の佐藤れえ子農学部附属動物病院院長・教授、同班の山崎弥生特任研究員が報告しました。佐藤教授からは、沿岸各地の避難所でのペットレスキュー活動や2016年の熊本地震の際にマースジャパンリミテッドより寄贈された「わんにゃんレスキュー号」の貸し出しなどについて、山崎特任研究員からは、



地域防災研究センターの福留教授



教育学研究科の森本准教授



農学部附属動物病院院長の佐藤教授



本機構の山崎特任研究員

これまでの支援活動で得た教訓を踏まえたVMAT（動物版DMAT）設立に向けたシンポジウム開催、ペット同行避難への理解を深めるためのシンポジウム開催などについて報告されました。

最後に、人文社会科学部五味壮平教授と「まちづくり研究会」の及川雅貴さん（理工学部2年）、佐藤倫さん（人文社会科学部2年）が、学生の地域活動・研究を支援するプラットフォーム「NEXT STEP 工房」について報告しました。五味教授は、NEXT STEP 工房設立の経緯を説明した後、学生達が地域での活動を通じて「地域に根差す（定着する）」ことを選択肢として考えるようになれば、地域創生の原動力になるだろうとの期待を述べました。次に、及川さん、佐藤さんから「まちづくり研究会」の取組として、雫石町での温泉街活性化を目指した住民主催の会議への参加や温泉街の昔の写真を頼りに街歩きを楽しむイベント「思ひ出さんぽ」の実施、陸前高田市の災害復興公営住宅での食事会やゲーム大会の実施、公営住宅共用部分の清掃活動への参加などについて報告しました。今後について、雫石町では学生が主体となり地域を巻き込んだ活動の企画・実施、陸前高田市では公営住宅からの退去者増加やイベントへの否定的な考えを持っている住民もいるなど、内容や工法の工夫が必要と感じていること、支援活動の必要性自体を考える時期にきているのでは、と感じているとの課題を述べました。



NEXT STEP 工房について報告する「まちづくり研究会」の学生（左）と五味教授（右）

最後の質疑応答では、NEXT STEP 工房の活動について温泉街の宿泊施設との関係についての質問や活動の持続性の方策として起業を考えてはどうかという意見、また、雫石町出身の卒業生からはとても有難い活動でますます頑張ってくださいとの激励がありました。

平成30年度 岩手大学三陸復興・地域創生推進機構 首都圏報告会

**復興支援の取組
新たな地域社会モデルへ**

各地域様々な状況で発生している災害。本学は東日本震災からの教訓、復興支援の経験から、あらゆる災害への対応を考える一助として、それを踏まえた新たな地域社会モデルの構築を目指しています。また、東日本震災からの教訓から、これまでの経験や教訓を踏まえた新たな取組も積極的に推進し、プラットフォームとして、被災地から見た復興のあり方を考えると共に、皆さまが身近な地域の防災意識を高め、災害に備える機会となるよう報告会を行います。石巻市は、被災地です。

日時 12月2日（日）13:10-16:10 **入場無料**

場所 日比谷図書館文化館（休館日を除く）**要申込**

日比谷コンベンションホール **申込：11月16日 締**

企画総括 岩手大学長 萩野 明
地域防災教育研究部門（地域防災研究センター）の取組
地域防災研究センター長 福留 邦洋
災害の教訓を踏まえた防災教育教材の開発と学校版タイムラインづくり
地域防災教育研究部門副部長 森本 晋也（教育学研究科准教授）
動物同行支援の取組 山崎 弥生（農学部附属動物病院）
三陸復興部門被災動物支援班 班長 佐藤 れえ子（農学部附属動物病院）
「NEXT STEP 工房」設立の経緯
「地域に根差す」学生の活動・研究を支援するプラットフォームとして
NEXT STEP 工房運営メンバー 及川 雅貴（理工学部2年） 佐藤 倫（人文社会科学部2年）
NEXT STEP 工房運営の学生グループ
企画総括 三陸復興・地域創生推進機構長 菅原 悦子

申込・問合せ先 岩手大学三陸復興推進機構
〒985-8501 岩手県釜石市大湊1-1-1 岩手大学三陸復興推進機構
TEL: 0192-334-2111 FAX: 0192-334-2112
E-MAIL: nextstep@iwate-u.ac.jp

主催 岩手大学
協賛 岩手県三陸復興推進機構、地域創生推進機構
後援 岩手県三陸復興推進機構、三陸復興推進機構、三陸復興推進機構、マースジャパンリミテッド、復興支援機構

研究紹介

災害公営住宅でのつながりづくり



三陸復興・地域創生推進機構 三陸復興部門 地域コミュニティ再建支援班 船戸義和 (特任助教)

ご近所とのつながりは、毎日の生活からストレスや問題を少なくして、暮らしやすい環境を整える役割を果たします。いざ、という時に助け合えるのも重要なことです。地域コミュニティ再建支援班は、生活復興の一環として、ご近所同士のつながりを築き、自立した地域コミュニティが作られるために活動をしています。

これまで約30か所の団地で自治会設立などを支援し、多くの団地では既に数年が経過しています。しかし、自治会役員からは「住んでいる人の顔と名前が分からない」「行事の参加者が少ない」といった悩みをいまだに多く聞きます。2018年に災害公営住宅5団地の入居者884名に行った「コミュニティに関するアンケート」*では、お隣3軒程度の住人の顔と名前について、48%が「だいたい分かる」とする一方、42%が「あまり分からない」と二極化しています。また、頻繁に行われるお茶会に「参加した」と答えた方は、意外にも14%です。孤立や孤独死が課題とされるなか、つながりづくりには時間と工夫が必要です。

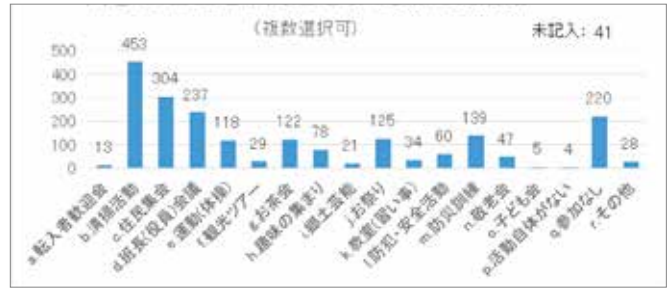
注目したいのは、清掃活動がこれまで参加した行事で最も参加率が高いことです。お茶会や趣味の集まりとは違って義務的ですが、人が集まるなら工夫次第で親睦の機会になります。ご近所同士で班をつくり、清掃場所を割り当てるだけでもお互いを認識しますし、終了後にその場でお茶を飲むように段取れば、会話のきっかけが増加します。アンケート結果でも、清掃活動に参加した方のつきあいの程度やお隣3軒程度の認識(ともに5段階評価)は、不参加の方よりも高いことが分かっています。

知らない人同士が集まる災害公営住宅では、最初に清掃活動や集金など「やらなければならないこと」を活用したつながりづくりが有効です。小さな工夫や毎回の清掃の積み重ねが、やがて地域の課題を解決する力となる。そのための



清掃活動の様子

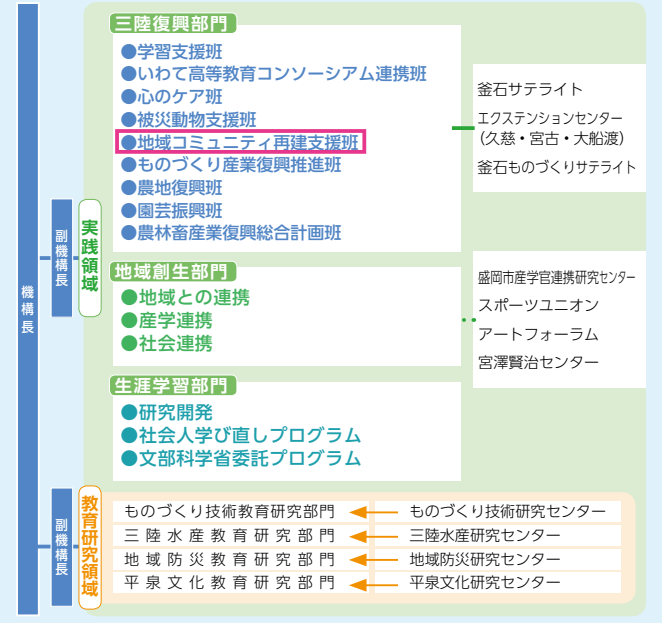
活動と研究を続けています。



入居以降、公営住宅や周辺地域にて参加した活動(複数選択可)

災害公営住宅のコミュニティに関するアンケート: 2018年1月、13歳以上の入居者対象、船戸*配布数 1,121、回収数 884 (回収率 78.9%)

三陸復興・地域創生推進機構組織図



久慈エクステンションセンターだより

久慈市共同研究員 川尻 博



●三陸ジオパークフォーラムの聴講と久慈市のジオサイトのご紹介

平成30年11月17日に久慈市で開催された「平成30年度三陸ジオパークフォーラム」を聴講しましたのでご紹介します。

NPO法人日本ジオパークネットワークによると、ジオパークとは「地球(ジオ)を学び、丸ごと楽しむことができる場所」とされています。

三陸ジオパークは、環境省が提唱した三陸復興国立公園構想を契機に、青森県八戸市の種差海岸から宮城県気仙沼市までをエリアとし、現在は日本ジオパークとしての再認定に向けた取り組みがされており、フォーラムではモニターツアーや地元中学生の総合学習への協力といった活動が紹介されました。



フォーラムでは地元中学校の発表がありました(写真提供 久慈市)

●みちのく潮風トレイルのコースとも重複

三陸沿岸の自然ツーリズムとしては、環境省が整備したみちのく潮風トレイルがあります。青森県八戸市から福島県相馬市までのロングトレイルコースで、三陸ジオサイトを通る箇所がいくつもあります。岩手大学は平成29年度に普代村との共同研究で振興策の検討に取り組みました。普代村に限らず各地でまちの魅力発掘と情報発信がされていますので、沿岸観光の際にはこれらの情報もチェックして楽しませてはいかがでしょうか。



フォーラム前日に行われたモニターツアーの様子(写真提供 久慈市)

連絡先/久慈エクステンションセンター

〒028-8030 岩手県久慈市川崎町1番1号 久慈市役所(2階) 政策推進課内
TEL:090-2953-2519 E-mail:kujijext@iwate-u.ac.jp